

邦 楽 現 代

PRO

MUSICA

NIPPONIA

第21号 1988年
21 秋

特集 ● 座談会

学校音楽教育における邦楽

特別寄稿 ● 戸口幸策

対談 ● 藤井公 ↑ ↓ **小田切清光**



巻頭言

とても古い事から新しさが生れる。

その頃、私は、日本の音楽について、あまり知らなかった。一九五四年頃の事である。洋楽の作曲家としては比較的、日本の作品を書いては居たものの、それはただ感覚で受けとめただけのもの、真の知識をもって居なかった。私は数人の有志と日本の音楽の勉強会を作って、月二回ほど毎回講師を御招きして、邦楽のあらゆるジャンルや、邦楽特有の微妙な表現、魂の込められたような限らない感性を知った。それは耳に玲瓏として響き、洋楽で育った私の目を開かせてくれるものがあつた。時には実技を交えながら、様々な会を見て廻り、能や狂言にも深くかかわりを持つた。そして同時に、現代の音楽としていささかのびなやんでいる欠落している部分が邦楽にあることも知つた。邦楽は、竹の葉の水気が集って、一滴の露となり纏まり、やがてそれが強くからみ合う美しさにある。美しさだけではなく、たくましくもなる。そうした洋楽には無い表現力をよく咀嚼し、その上で、洋楽の持つ合理と技巧をとり入れて作品を書いて見たいと思つた。それが現代の日本の音楽になると思つた。しかし、私の前にはその時、全くなんの御手本も無かつた。

文字通り、無からの出発である。一九六四年初めて邦楽器だけの作品を書いてみた。その頃、おそらく日本音楽集団の三木さんも、長沢さんも同じ事を考えられ、動き始めて居られたのであろう。

ともかく、それは謙虚であり、極めて真面目な出発であつた。この事はすぐ大きな反響を呼んだ。演奏家からの熱心な動きかけもあつて、それはさながら燎原の火の如くも広がりを、一つの頂点に達した。この間の喧騒については、すでに周知のことであり、今ここで触れるつもりはない。私達の当初の考えとは異なる大きな渦ともなつておそろしい早さでピークに達し、そして、大波の引くようにサツと消え去つて行つた。私達の志した邦楽器による現代曲は終つたかに見えた。

しかし一度蒔かれた種は確実に残り、静かに、今度は落着いた成長が始まつていた。今は、若く新しい作曲家が正しい認識をもって参入して行く人が多くある。よい事である。私達には無い斬新で新しい技法による音が、さながら、邦楽器をつなつて、泉の底から湧き出してくるよう感じられる。その鋭利でとぎすまされた突刺すような感性で、しかもその中に美しくも、たゆたうような日本の音が聞けた時、私は、なにか受けつがれたような喜びを感じる。

日本の音楽によく通じ、愛し、その美感が活かされていこそ、邦楽器に接する意義があり、それがないければ洋楽器でよいのだ。

今は、おびただしい先人の御手本が目の前に限りなくある。

日本の音に対する知識と心を持たずしてみだりに邦楽器に手を染めるべきではない。それは、あまりにも浅薄で、かえつて自国の楽器をもてあそぶことになり、真の現代日本音楽の創造にはならないと思うのだが……

牧野由多可

目次 ● Contents

巻頭言

牧野由多可

1

特集／座談会

学校音楽教育における邦楽

上木康江・北原富山・茅原芳男・野口啓吉

田村拓男(司会)

2

特別寄稿

音楽を聴く

戸口幸策

7

対談

藤井 公 ↑ 小田切清光

9

現代邦楽事情 その5

田中隆文

11

日本音楽集団定期演奏会から

第14回定期

石田一志

13

第15回定期

美恵子の三味線みてある記⑤

野口美恵子

16

小さな空間、大きな出会い

— サロンコンサートレポート Vol. 4 —

ほうげん抄

日本音楽集団の主な活動記録

日本音楽集団の今後の予定

日本音楽集団メンバー表

お知らせ・編集後記

22

19

18

17

17

「学校音楽教育における邦楽」

今回の学習指導要領改定の意義と今後の課題

特集 座談会

出席 上木 康江

東京芸術大学教授

北原 篁山

邦楽4人の会代表

茅原 芳男

邦楽教育を推進する会代表幹事

東京子ども邦楽合奏団主宰

野口 啓吉

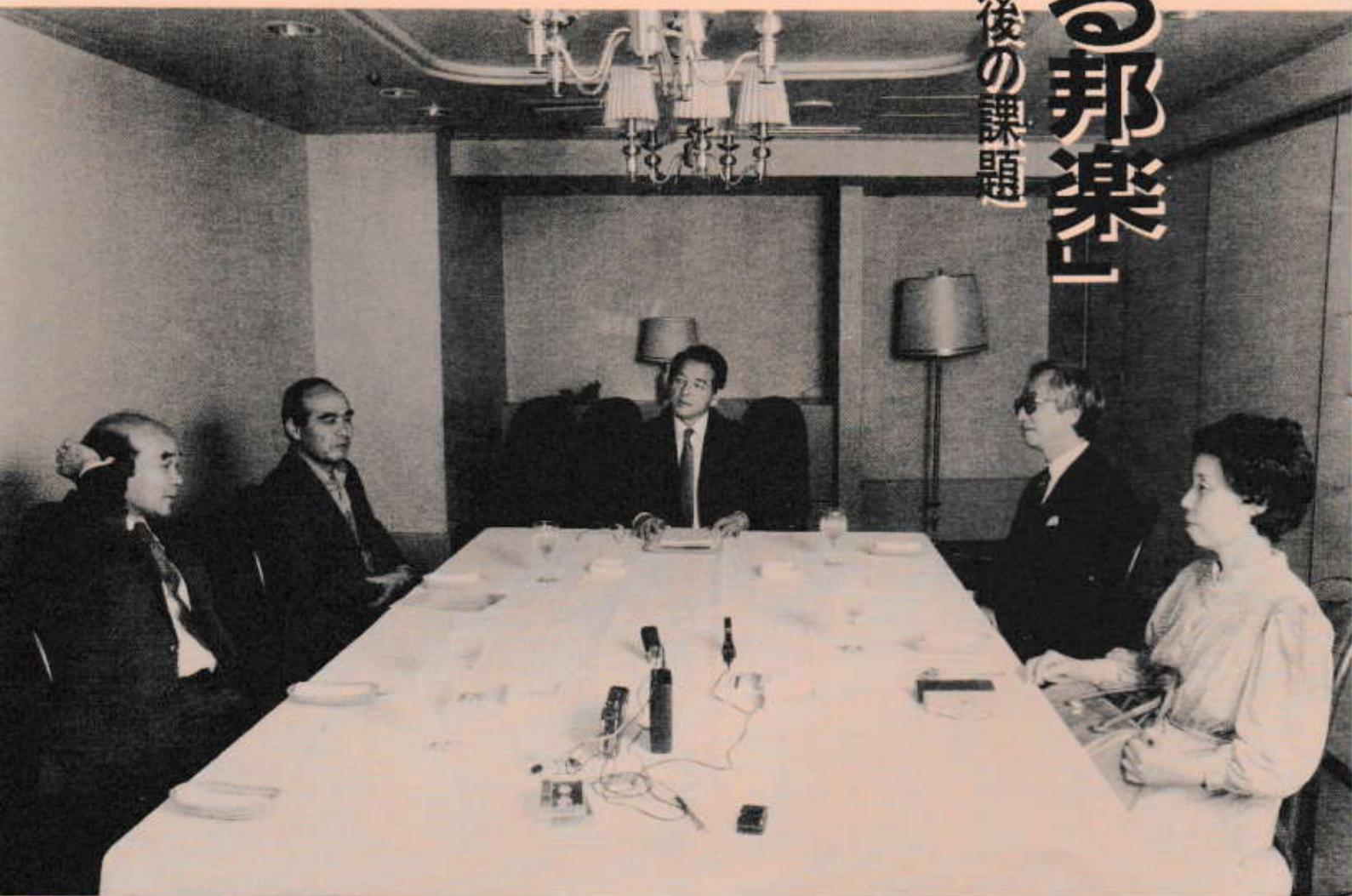
都立白鷺高校教諭

司会 田村 拓男

日本音楽集団指揮者

今回の学習指導要領改定に当たって邦楽界では、かつてない盛上りを見せた。

短期間にも拘らず、二十三万の署名を集め、国会の音楽議員連盟の支持も取りつけて、文部大臣や文部省にも直接陳情するなど、その成果は大きいものがある。十二月二十六日には、「子ども邦楽フェスティバル」が企画されており、すでに多数の申込みがあるという。邦楽界の将来に光明をもたらした今回の一連の動きやその意義・今後の課題について語って頂いた。





北原 篁山氏

「邦楽教育を推進する会」の誕生

司会 今回の動きの中でも中心的な推進役を務めたのは、何と云っても「邦楽教育を推進する会」(以降「邦推会」と略す)であったと思います。まずその代表幹事の茅原先生から、会の誕生と活動情況の報告をお願いします。茅原 「邦推会」の目的は、今回改定される指導要領に、和楽器なり邦楽というものを先ず明確に位置づけたということとです。そうすることが邦楽の将来にとっても絶対に必要な条件であろうということは、教育現場で生活していた者として感じていた訳です。そうしたことから、個人

的とか一部の人が運動するというのではなく、邦楽界の皆さん方のご賛同を得られるようなことが出来なにかと思ひ、差当り私の存じ上げている方にお手紙を出すことから始め、次から次へと紹介して頂いて沢山の方々からお手紙を頂くことが出来ました。会を設立するに当たっては「結構だ、大いにやれ」という賛同者の方が多くいらして、それではということと取組んだ訳です。

最初のお手紙を差上げたのが去年の秋から暮れにかけてです。会の設立の集いが今年の一、二、それから正式に組織的な活動に入って来た訳です。文部省への陳情書や要望書を作る作業や、支持して下さる方々への

の呼び掛けは署名という形に進められて行きました。その結果、指導要領改定に結び付く訳で、キツカケは私どもで作ったかも知れませんが、ある方の紹介で直接文部大臣に陳情出来たこととか、音楽家ユニオンを通して国会の音楽議員連盟・同振興会へのコンタクトも取れ、議員の方々が支持して動いて下さったことが大きかったと思います。お陰様で前途が明るくなるような方向が出て来たような気がしますが、九月十五日には第一回の総会を開いて規約・役員をきめ、ご承認をいただいて今日を迎えている訳ですが、全てはこれからという会です。

野口 西洋音楽をやって来た我々にあって、今回の出来事は、ある人は驚きや戸惑いの目をもって見ています。現場の教師がこういう時に、もう一度白紙に戻って、日本の失われていた精神的なもの、日本人らしさ、日本的な音楽性というものを見直す時が来ているのではないかと思ひます。「邦推会」の名簿を拝見しますと、邦楽界の有数な方々、人間国宝や大学の先生や演奏家など、立派な方がそろっていらつしやいます。これからは現場の先生方にアドバイスしていただけるような、全国的な組織態勢を作って頂きたいと思ひます。

司会 九月十五日の第一回総会では、約三百通の案内状を出し、特に電話等でフォローするとかはしなかったにも拘らず、フタを開けてみたら八十数名の方々が出席され、スタッフの心配がふっ飛んでしまいました。

いことだと思ふ。ともかく甚大の立場としては、この運動と一緒にやっで行きたいと思つています。

北原 私たちは外国に行つて演奏することが多い訳ですが、その際に、外国の人が初めて聴くということは当然なことですが、そこにいるいわば日本のエリートの人たちが、初めて日本の楽器を聴いたとか見たとかで、非常にすばらしいと言つてこられる。これは寂しいことで、やはり小・中・高校の教育の中で、ピアノやヴァイオリン、フリュートに親近感をもつと同じように、日本の楽器にも持つてもらふようにして欲しいと思ひますね。

茅原 一つの組織にまとまることのできたら、実に理想的です。しかしそこまでは全然考えていません。やつて下さる方、応援して下さい。ただで頭張ろうという訳で、「邦楽界が丸ごと」というようなことをいいますと、「じゃ一つにまとまらなくてはいけないのか」というふうにとられてしまう。決してそういう意味ではないんです。

北原 とにかく日本の子供たちに日本の楽器を持たせる、それによって教育する。楽器屋さんたちも、可憐い子供たちに楽器を持たせたいと、ポスター等を積極的に貼つたり、自分たちの運動としてやっている姿勢が見え、「ああこれはとてもいい運動である、発展しつつあるなあ」と喜んでいるところです。

邦楽界で二十三万人の署名が...

司会 署名運動をしたんですが、十
いぶんいろんな方が積極的にやって
下さいましたね。百万の目標が実際
には二十万でしたけれど……

野口 「和楽器も学校の実情に応じ
て取扱うことを示す」と書いていま
す。「和楽器」ということばが入るか
否かで大違いです。「邦推会」への教
員の参加も徐々に増えると思いま
すが、その時に全国におられる邦楽
家の皆さんとドッキングしてこそ初
めて成功することになります。

上木 邦楽界にはいろんな大きな団
体や組織がある訳で、もし仮にそう
した組織のいくつかがこの運動に賛
成して下さったなら、万単位の会員
をお持ちの団体もありませんから四
つの組織があれば（一枚の署名用紙
に二十五人書ける）百万くらいい
ないと思っただけです。この辺が甘い
といえは甘かった（笑い）

野口 残念なことに現場の先生たち
には、まだ浸透していない。実際に
答申を見て、どこまでいけるかとい
う不安もあるでしょう。分っている
人と、そうでない人とのギャップを
埋める努力をしなければならぬと思
う。また邦楽界の人たちだけがや
っているのではないかという印象を
もつちやう。

茅原 一月設立総会の時、伊波先生
（前文部教科調査官）が、「なるほど
「邦推会」には高名な方がいらっしや
るが教育界に人がいないではないか」と
指摘された。全くその通りなんて
して、教育を進めるんですから教員
が入っていないはおかしいんです。
では、今の段階でどのくらい呼び込
めるかという点、非常に難しさがあ
る。しかし、今回の指導要領改定は
邦楽の存在というものについて考え

るキツカケを作ってくれたというこ
とでも高い価値を持っています。
野口 「和楽器も学校の実情に応じ
て取扱うことを示す」と書いていま
す。「和楽器」ということばが入るか
否かで大違いです。「邦推会」への教
員の参加も徐々に増えると思いま
すが、その時に全国におられる邦楽
家の皆さんとドッキングしてこそ初
めて成功することになります。

上木 地方には沢山いますけど、元
来、邦楽は教育から離れてきた音楽
でしょう。教育音楽としての意識は
低いですよ。自分の流派だけにこだ
わることになると思う。これをドッ
キングさせることの大変さならなら
ないでしょう。教職をとる段階から日
本のものを教えて先生になればいい
ですよ。そういう人たちが全部入
替えちやえばいいけど、そうはいか
ない。

野口 残念なことに現場の先生たち
には、まだ浸透していない。実際に
答申を見て、どこまでいけるかとい
う不安もあるでしょう。分っている
人と、そうでない人とのギャップを
埋める努力をしなければならぬと思
う。また邦楽界の人たちだけがや
っているのではないかという印象を
もつちやう。

楽譜のことを研究す る団体が欲しい。

野口 あの時演奏した長唄の楽譜は、
芸大の菊岡先生に書いて頂いたんで
すが、五線譜のほかに横譜の文化譜
も使っています（音楽の授業でも同
じように）。純正調のキーボードで
音程をつかみ、最初のうちはメトロ
ノームでテンポを合わせ、徐々に仕
上げていったんです。「ま」とかの問
題は難しい。現場の教師としては、
その曲のもつ普遍性・特殊性を忘れ
てはいけません。取敢えず基本
的なことを教えることではないのでは
ないでしょうか。

野口 楽譜の音楽ではないと思うんです。
北原 私たちも伝統音楽は従来譜を
使っていますが、現代作品の場合は
五線譜です。
上木 ええ、そのことは別です。し
かし新しい楽譜を研究する必要がある
と思えますね。どこの流派のを使
うということではなく、お節だった
らどんな楽譜を使うのがいいかとい
うようなことを研究する団体が欲し
い。そして学校教育用の新しい日本
の歌を作る必要があるんじゃないか
と思います。

野口 野口先生がお勤めの都立白鷗
高校では、なんと八十三丁の三味線
で合奏なさるということを聞いて、
先日の創立百周年記念式典での演奏
を聞かせて頂いた訳ですが、実に見
事なもので驚きました。音楽の授業
でも生徒に三味線をさせていらっし
やるそうですね。

野口 私是最初から邦楽はこういう
ものだというところから始めたらい
いと思っっているほうですから。古
典的というか、西洋の音階ではなく
日本の音階で作ったもの。流派など
を離れて、ある何人かの選ばれた人
たちで、全く別の教材を作るべきだ
と思います。

野口 野口先生の場合は特別であっ
て、普通の現場では五線譜を使っ
ているという現状からスタートしな
ければならない訳で、そこでききなり
縦譜や古曲をぶつけた場合に、先生
や子供たちはどうなるかということ
がありますね。

上木 私は最初から邦楽はこういう
ものだというところから始めたらい
いと思っっているほうですから。古
典的というか、西洋の音階ではなく
日本の音階で作ったもの。流派など
を離れて、ある何人かの選ばれた人
たちで、全く別の教材を作るべきだ
と思います。

縦譜・横譜は能率的？

野口 野口先生がお勤めの都立白鷗
高校では、なんと八十三丁の三味線
で合奏なさるということを聞いて、
先日の創立百周年記念式典での演奏
を聞かせて頂いた訳ですが、実に見
事なもので驚きました。音楽の授業
でも生徒に三味線をさせていらっし
やるそうですね。

野口 野口先生は「教育流邦楽」と
いう新しいことばを主唱していらっ
しやうって、既に相当なマニユアルを
揃えていらっしやるのではないかと
思います。

上木 大きな問題としては二つある



上木 康江氏

と思います。一つは指導者の育成、もう一つは実務面での指導の内容と方法の問題です。これは本来文部省がやる仕事ですが、今回の指導要領改定で一番意義があるのは、邦楽というものの存在を先ず先生たちの意識の中に入れてあげることが出来るだろうということ。内容・方法の問題は北原先生もおっしゃったように、そう簡単に結論はでないと思います。私はそれなりにやってきたものがあり、発表する機会があれば致しますが、今はその段階ではないと思います。ただ一言でいいますと、今の子供にも受入れてもらえるような内容を前提として考えていることは確かですね。それはわらべうたであったり、唱歌のようなものであったりしますが、それも一つの方法ではないかと思っています。

野口 生徒は五線譜が読めるかといえば、読めませんね。ハ調だって読めないんだから、移調・転調はちろんだめ。私の生徒は横譜で三味線をやっていますが、そのほうが能率的で早いということに気がつきました。しかし教師にとっては指導上、五線譜は欠かせません。今後ますます重要なものとなるでしょう。横譜も五線譜もまだ完全ではありませんが、現場の教師と一体となれば改良できると思うんです。「邦推会」でもその方向がいいと思います。

茅原 それは私も同じ経験をしてきました。五線譜と筆との結びつきいろいろやりましたが、ものすごく時間をかければ出来るわけですが、やはり縦譜とか横譜とか昔の人の頭の良さに頭が下がったという次第です。北原 どうも降参しなければいけないみたいだけど、上木先生がいらっしゃったように統一したものでやらなければ意味がないわけでしょう。

上木 だから、それだけは教育用・教材用のものを文部省が指定して作らなければならないですね。

茅原 一つのサンプルとしては上木先生もお作りになったNHKのテキストが五線譜と併用しています。あれがいいと思いますね。

上木 あれだって私は併用したくなかったんです。(笑い)

茅原 ただ、先程も田村さんからありましたが、現場で現実には五線譜しか使っていないんですから、その中へどう組込んでいくかということですね。言葉は悪いけれど、現状にいかにか妥協するかということがありとおもいます。

自分の体を和楽器にする。曲想にに応じて発声を工夫する。

野口 ロシアの合唱演奏会にはユニゾンの歌が多いと思いますが、日本では何でも四部合唱で、学校でも四部合唱でなければ学校の音楽ではないみたいなのがあります。

北原 日本にいますと、四部合唱が全世界を覆っているように思われるかも知れないけれど、インドでは西洋音楽の影響を受けていませんし、チエコとかハンガリー、ポーランドなどは依然として民族音楽なり、民族の歌が強く残っている訳です。日本でも日本の音楽を一般的なものにするために、子供の時から触れさせることが必要だと思います。これから日本が文化の面でも先進国になろうとすればするほど、自国の独自性を音楽の面でも持たなければなりませんね。

野口 発声法訓練の目標は、自分の体を楽器にすることだと思います。和楽器を導入した授業での発声指導で大切なことは、自分の体を和楽器にすることです。お箏、三味線、尺八も日本の楽器ですが、私は常に生徒に「自分の体を日本の音楽を奏する和楽器にすること」といっています。ハンガリーならハンガリーの、ロシアならロシアの楽器にしているということでしょう。

茅原 それで今回の改定では、発声に関するものが取上げられて、「曲想に応じて発声のしかたを工夫する」とありますが、これは今までになかった発想で、むしろ和楽器以上に大きなことだと思います。これを文部省が果たしてどこまで考えているかわかりませんが、発声ということがからんでくると、例えば民謡を仮に混声四部で歌う時、追分的な発声が必要だとすると、それを使ってもいい」ということです。今まではそれすら認められていませんでした。そうした発声は悪であるというようにとらえ方すらされていた。

上木 ベルカントみたいなのをみんな教えるんですか。

茅原 そうです。それ以外の発声で

歌ったものは教育界では認められないし、無視されるんです。

司会 発声の項目はなかったんですか。

茅原 ありました。小学校の場合は頭声的発声を基本とするという訳で、それはつまりベルカントにつながるんです。そこへそれが入ってきたというところで私には驚きなんです。

司会 本誌前号の平井澄子先生の話の中にもありますが、「日本音楽の原点は日本語」である訳で、日本語をいかに美しく発音して我々の音楽にするかということですから、そういうことで考えればベルカント唱法が日本語に通しているかどうかの問題にもなります。野口先生の「体を和

楽器にする」とおっしゃることにはうなずけますね。

指導者の問題。東京くらいシラケたところはない？

北原 茅原先生や野口先生のような熱心な先生が、一つの県とか地方にせめて十人位おられたらいいと思いますね。

上木 地方はまだいるかも知れませんが、東京くらいシラケたところはないですね。三年前から夏休みを利用して先生方対象の講習会を開いていますが、今年も応募者九十人の内、東京は一人もいませんでした。芸大の教職実習生の受入れについても、





校長先生に一生懸命手紙を書いてお願いしますが、地方の学校のほうが受入れてくれます。それと教職をとるには、日本の楽器を必修にするのを文部省で決めて頂きたいですね。

茅原 免許法改定ですね。

北原 邦楽演奏家も自分たちの側から担当を決めてポランティアで演奏や指導にできることがあってもいいと思いますね。

茅原 県単位とか、なるべく近いところで実技研修をうけられればいいですね。それも本来ならば文部省からの予算で教育委員会が主催して欲しいのですが、おいそれといかないでしょうから、すぐにはやりたない地域には邦楽家の方が出向いて

「どうぞおいて下さい」という態勢が出来たらいいと思います。

楽器の中で一番易しいのはお琴かもしれませんね。チューニングさえできれば、たとすれば「お琴をこうすれば、この弾き方ならば明日の授業に役立ちますよ」というような内容のものを邦楽家の先生方から教えて頂けたらと思います。

展望は明るい。洋楽の方にも邦楽の必修単位を。

司会 今後の邦楽界の展望をお話して下さい。

茅原 方向としては非常に明るいのではないのでしょうか。ただし、相当

な時間は必要でしょうが、

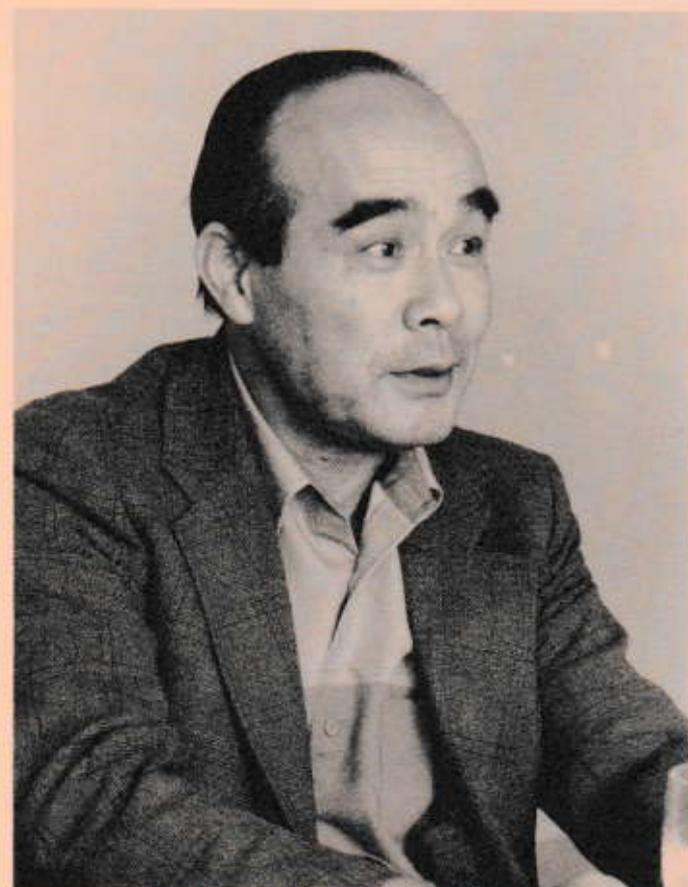
野口 日本の音楽教育はピアノなどの鍵盤楽器中心でやってきたでしょう。西洋で鍵盤楽器というのと、もう二千年の歴史があるんですが、日本には百年位の歴史しかない。日本にはお琴とか三味線、胡弓、笙、ひちりきなどの歴史が何百年も前からある。それらで示した先達のセンスはすばらしいものがありますよ。そういったことに少しずつ気がついてきたのだと思います。

北原 世をあげて国際化の時代といわれていますが、今は個性を尊重する時代ですから、音楽の面においても、明治百年以来の西洋音楽中心の時代から、民族楽器や日本の伝統音楽がクローズアップされてもいい時代になっているのではないかと思います。

最近行ったエジンバラの音楽祭でのイギリスの新聞評に「日本はオーケストラに代表される西洋音楽に押しつぶされて、民族音楽とか民族楽器というものは博物館に行くような音楽で、もう衰退しているのかと思つたら、それどころか新しい発展を遂げて非常に栄えているということがわかった」と書いていましたが、音楽界にとっては、もっと知らせるっていうことは国際化の大きな眼目だと思えます。

上木 芸大にもよく外国の方がいらつしやいますが、ピアノや声楽ではなく、邦楽をお聞かせすることに なります。

それと最近の傾向として、受験者



が非常に少ない。生田流の箏曲だけで面目をたもっているという状況です。これからは新しい教育の方向で、学生も増やし、その人たちが教育の現場へどんどん出て活動できるようにして行くことが、私ども教師の義務だと考えているんです。

茅原 洋楽の方にも、邦楽の必修単位をつける。少なくとも芸大たるものは率先してやるべきだと思つてます。教員免許にかかわらず芸大という名前を頂く以上。

それから普通の授業に邦楽の方が入り込むことは、非常に難しい問題だと思えますが、学校には邦楽部とか箏曲部とかクラブ活動が非常に多いですね。そうしたところを邦楽を

やっつけてらっしゃる方の職場とっては変ですが、定着させるような動きかけを皆で教育委員会や校長にするのも一つの方法だと思えます。

司会 いろいろと希望の持てるお話をうかがえて、今日はとてもよかったです。どうも有難うございました。

芳原 芳男氏

音楽を聴く



今日までのところ、西洋音楽は、主として、西洋におけるシリアス音楽の様式史として成り立って来たと考えても、さほど見当外れではないでしょう。

ヨーロッパにおいては、中世に、広義の西欧型ポリフォニー（原則として、相互の音程関係が意識された、高さの異なる二つ以上の音を、そ

の組み合わせを変えながら、豊かせる「組み合わせ音楽」が成立して発展し、ほぼ十四世紀以降は、職業的な作曲家は、すべて、このようなポリフォニーを創り出さなければならなくなつて以来、シリアス音楽は、人間の心や感性と深い係わりを持ちながらも、生活そのものや、諸々の文化的文脈から、相対的に独立した、強靱

なひとつの世界を構成しました。西洋においても、諸芸術の中で、作品を産み出すことが、コンポジション（構成）の本質は、「一緒に置く」の意）と呼ばれる分野は、音楽のほかには無いように思われますし、西洋以外のどこかの地域や民族に、音楽を創り出すことを「構成」というような語で呼んでいる例が有るといふこ

とを、私は寡聞にして知りません。ヨーロッパにおいても、中世の或る時期までは、モノフォニー（一つの旋律だけの音楽）とポリフォニーといったような、様式的にまったく異なる類の音楽が、同じ時代に、平行して、創作の面で、重要な役割りを果たしていたのですが、作曲という行為が、ポリフォニーを創り出す

ことを意味するようになってからは、地域によって多少は前後するものも、少なくとも、西ヨーロッパにおいては、ある時代に支配的になった音楽の様式が、どの地域にも浸透し、またほとんどすべての種目に貫入して、それぞれの時代様式を形作るようになりしました。

このような状況のもとでは、それ

その時代の作曲家は、若い時に親や師から音楽の作り方を教わっても、それを踏襲しているだけでは、創造的な音楽家とは見做されなくなってしまう。作曲家は、自分の育った音楽言語を踏まえながらも、それを一歩先に進め、それを拡大するような、新しい語法を開拓しなければならぬ。新しい語法を開拓しなければならぬ。新しい語法を開拓しなければならぬ。新しい語法を開拓しなければならぬ。

作曲家は、自由な創作家であるというよりも、むしろ、音楽の様式的展開の中に組み込まれた曲のひとつとなつてしまった感があります。しかも、この状況は、自由と個性が尊重されているかに見える、近代から現代にかけても、決して解消されなわけてはありませぬ。西洋のシリアス音楽の波をもろに被った日本の作曲家たちの一部が、西洋人のや

っていることを、きよらきよら見回して、やれ十二音音楽だ、ミニマル・ミュージックだ、ポスト・モダンの新ロマン主義だなどと言つて、大いに主張してきたのは、創るほうの側も、つまるところ、様式的価値観に捉えられていたということを示してはいないでしょうか。

日本の作曲家たちの多くが、より日本的感性に沈むようになった今日においても、また別種の様式的価値観を踏まえた、作曲や、音楽の価値判断が支配的であるように思われ

ス音楽の領域においては、今でもなお、新しい曲が創られて初演されるような時には、無意識のうちに、西洋型の様式発展史の中に身を置いて、その曲に対する価値判断がなされていると思われる場合が、跡を絶たないからです。剽窃は全く別問題として、この手法は、誰々のものだから、もう古い、といったようなことが語られるのを、そのような価値観の一端を示していると思ふことは間違

つては、この種の価値観が悪であると言つてもはありませぬが、それはともかく、逆に言えば、右のような事情が有つたればこそ、西洋音楽史は様式史として成り立ちえたと云えるのです。

様式史は、結局のところ、創作の歴史ですが、音楽の歴史が制作史として成り立ちえたのには、また、グレゴリウス聖歌などを例外として、それぞれの時代において、主として、同時代に創られた音楽が、愛好家に享受されていたという状況が、暗黙のうちに、支えになっていたと考えられます。

しかし、特に二十世紀に入つてからは、肝心の西洋においても、シリアス音楽の分野においては、同時代に創られた音楽よりも、過去の音楽のほうが、ますます多く享受されるようになってきていることは、周知のとおりです。(この点では、日本音楽集団の演奏会などは、例外中の例外です)こうなつてくると、音楽史そのものも、単に様式史として

のみでは捉えられにくくなることは必定ですが、今は、この問題に立ち入る暇は有りませぬ。

十九世紀の西洋では、様式史的価値観において、当時の音楽が最も優れたものであつて、過去の音楽は、その、より優れた音楽に至る過程であるかのごとくに見做されてしまつた。ソナタ形式の曲は、主題が二つ有るがゆえに、主題が一つしか無い

フーガよりもいい音楽でした。二十世紀も進むと、このような進化論的価値観に対して疑問が呈されるようになり、それぞれの時代の音楽様式は、それ自体で意味を持つて

いるという見方が、より一般的になりました。しかし、西洋の、いわゆるクラシック音楽が、最も優れた音楽であり、その他の音楽は、それに

どのほど近づいているか、あるいはまた、どのほど隔たっているかに応じて、その価値が云々されるという状態は続いていました。最近では、ようやく、世界中のそれぞれの地域や、それぞれの民族は、独自の音楽史を持つているのだという見方が、かなり一般的になってきているように思われます。しかし、シリアス音楽の分野における価値判断が、無意識的にも、一種の様式的価値観によってなされていることは、前に触れたとおりです。

と、そんなことはどうでもいい。要は、その音楽が、自分になんらかの感動を与えたかどうか、自分にとつて面白かつたかどうか、ということだけから、良し悪しが言えるようにはならないものだろうかとも考えています。

この点、いわゆるポピュラー系の分野では、人々の反応は、もつと素直であるように思われます。自分にとっていい音楽が、一番いい音楽なのです。(シリアス音楽に関して、

このような価値判断に徹していると、自分で思える人は幸せです)きょう良かつたものが、あす良くなつても、一向に構わらないのです。しかし、今日の歌謡曲のように、きょう

多くの人々に好まれていた曲が、あすはもう、忘れられているという状況は、歴史を振り返ってみれば、少なくとも、十八世紀ごろまでの西洋におけるシリアス音楽の状況と非常によく似通っています。謝肉祭に

大好評を博したオペラは、クリスマス

少なくとも現在までのところ、西洋の美術に最も大きな影響を与えた日本の美術と言へば、浮世絵が筆頭に挙げられるでしょう。今、盛んに話題になっている、十九世紀末から二十世紀初頭にかけての、フランスなど

における、いわゆるジャポニズムの中心をなしていたのは、江戸時代の美術における演歌的存在であつた浮世絵なので、今日、今日の演歌が、いつの日か、また新たなジャポニズムの中心的な役割りを果たさないと、誰が断言できるでしょうか。

勿論、音楽の分野にしても、美術の分野にしても、新しい何かを創る人たちは、できるだけの工夫をすることでしょうし、なんらかの新しい

が無ければ、真の創作とは言えないでしょう。しかし、その新しさは、なんにも様式的な新味でなくともいいのであつて、人々を、引き付ける、なんらかの要素を持つていて、この

ほうが大切だとは考えられないでしょうか。新しい音楽作品に接する人々は、シリアス、ポピュラーの別を問はず、その作品が、歴史上どのような位置に在り、歴史的にどのような意味を持つてい

対談

BIG DIALOGUE

藤井 公 ↔ 小田切 清光



思えば出会いは二十三年前

小田切 藤井さんは合唱団に入っておられたことがあるそうですね。

藤井 ええ、ずっと昔、混声合唱団で歌っていたことがあります。音楽が好きだったので、ふとした機会に舞踊を知り、舞踊の方も魅力があつて。本当は音楽をやりたいなつたんで。

小田切 成程、それで楽譜が読める訳ですね。楽譜を見ながら振り付けをなさっているのを拝見し、舞踊家の中ではユニークだと思いました。

藤井 いや、他にも音楽から舞踊に入ってきた方もいらっしゃるから。

小田切 ばくも若い頃、絵描きになりたくてその方の学校を志したのですが、いつの間にか詩ばかり書いていました。今からでも絵をやろうかと思ったりします。現代詩の片隅でゴソゴソ詩を書いていたのですが、ある日、一篇の詩が合唱曲になり、三木さんと知り合い、ちょうど同じ頃に、小さな詩の会で藤井さんと知り合ったのです。三木さんと三人で神田の私学会館の喫茶室で話したのを今も憶えています。一九六五年ですから、もう二十三年前になりますね。三木さんに誘われて、その年の十月、集団第二回演奏会から聴かせて戴いています。

藤井 うちの、東京創作舞踊団の第五回公演で「もぐらの物語」(一九六七年、小田切作詩・三木作曲)を上演しましたが、小田切さんや三木さんと一緒に仕事をしました最初で、

続いて三人で「徳えぬ川」を。

小田切 三木さんが横浜国大グリークラブから依頼され、ばくに詩を書かせて下さった作品が「もぐらの物語」です。苦勞しました。今でも「もぐらの物語」のプログラムにメッセージを載せられると書くことですが、本当に目を潰そうかと思つた程で、目が見えるから書けないんじゃないか。ほとんど盲目に近いもぐらです。から、でも両目潰したらものが書けなくなる。せめて片目でもと、本気で考えました。深夜、真暗闇を四つ



藤井 公氏 (現代舞踊家)

藤井 集団の演奏は、度々聴かせて戴いていましたが、海外で拝聴した時は、感激でした。あれはたしか一九七二年、ドイツのケルンで偶然、ちらしを見て、コンサートに伺いました。その時の感激は忘れられませんが、ニューヨークに半年程いて、それからケルンに来てちらしを見て「あー」と思わず歓声をあげ、早速伺つたのです。

小田切 それは感激ですね。ばくに於いて集団の演奏はオアシスのように感じて、清く澄んだ音の世界に酔うのが楽しみな訳ですが、外国で聴く集団の演奏は、格別の感動を覚えることでしょうかね。藤井 とにかく感激でしたね。洋舞と洋楽ばかり見聞きしていた時でしたから。コンサートが終わった後、胸の中が熱く

熱くなつて。そのケルンでの演奏を聴き、モダン・ダンスを海外へ持って行って通じるものは何か、モダン・ダンスの民族性ということを真剣に考えさせられました。非常にショックでした。演奏は絶賛されて嬉しく思いました。その時に聴いた野坂恵子さんの演奏の「天如」(三木作曲)に感動し、我々もやっぱり考える必要があると感じながら帰国し、加藤みや子さんを使って「天如」を舞踊

にしました。他に集団の音楽では、

琵琶の弾き語りの「遼河」(小田切作詩・長沢勝俊作曲)、「古代舞曲によるバラフレイズ」(三木作曲)を舞踊にしていますが、これは「古拙五連画」という題で上演しました。大体、集団のレコードは二枚ずつ買って、一枚は擦り切れる程聴き、一枚は本番用にとっておくんです。

小田切 高校生の頃だったと思いますが、人形劇団ブーケの「桃太郎」で初めて長沢さんの音楽を聴き、感銘をうけました。戦後間もない頃にお名前とその時の清冽な笛の音が忘れられずにいました。その長沢さんに「遼河」を作曲して戴き、半田淳子さんの琵琶で、日生劇場で上演、大成功でしたね。

藤井 あれも、ばくは音楽に惚れ込んで作舞しました。そう、それから今年の三月、ニューヨークのリンカーン・センターでの「楽市七座」(和田兼作曲)は、すごく好きになりました。集団の演奏が始まる前の、静寂感・緊張感、一人一人登場してくるあの空間は素敵でした。和服の素晴らしさを再確認しました。これから演奏が始まるんだというあのひと時、もう集団の音楽の世界に吸い込まれていました。

音楽や詩に感動してこそ、創作意欲が湧いてくる。

小田切 舞踊は音楽との関わりが、何より大切なことと考えますが、ピタッと合えば触発されてくると思えます。良い音楽に巡り合うまでが、大変だと思えます。藤井さんは、ど

海外で聴いた集団の演奏に感激

のような時に、着想を得て、舞踊を創られるのでしょうか。

藤井 良い音楽を聴いて感動したり、何か見たり聞いたりして感動しなくは、振り付けが出来ません。その感動の喜びを舞踊に置き換えて、舞踊の美しさで見せたい。例えば、ある時、満天の星に感動して、「天空の踊り」という作品を創ったことがありますが、つまり感動の深さが作品を昇華していくような気がしますが、感動が浅いとやはり良い作品は出来ません。ですから、ぼくの場合、色々詩を読んだりして感激したものを踊りにしてみようという考え方でやっています。音楽がいいと、音楽に負けないような踊りにしようと、フアイトが燃えて来ます。でも、音楽を使う以上、音楽が生きたり踊りを創りたいという考えを持って踊るんですが……

小田切 作家も何か刺激がなかったら、藤井さんの言われる感動がなかったら、なかなか書かないです。と同時に、ハードルという障害を持っていないと駄目ですね。締め切りのない仕事は、後まわしにして、いつまでも駄目です。

藤井 ぼくも自由だから、やろうとやるまいとかまわらないんだけど、年に一度のリサイタルの時に最善を尽くして、リサイタルに向かって一年間ため込んだものを全部はき出して発表する。自分に厳しく、一年に一度は作曲活動としての生き甲斐に生きようと考えています。リサイタルが終わると、頭の中が空っぽになっちゃうって、次の作品のための

エネルギーを何かから得ようと努力をしている。唯ボヤツとしていては駄目で、常に探している訳です。感動のエネルギーが作品を苦しめながらも創り出す原動力になっています。

三味線の曲を使って幾つか踊りを創っていますけど、去年「津軽山姥七変化」というのをやりました。三味線もいいですね。何でも好きになっちゃうってというのは、芸術活動において必要じゃないかな。そこから創作意欲が引き立てられる。まずそういうのがなくて創っても駄目なんだなあ。次から次と絶えず作品を創っていますが、沢山創るっていうことも必要じゃないかなあ。

まず、休まずコツコツやること、そこに発見がある。

小田切 その通りですね。何にでも興味を持つこと、そして、コツコツと自分の歩幅で歩くことではないでしょうか。後世に残るような名作を書こうなんて、とても無理。出来ないうこと。絶えずコツコツとスケッチをするように詩を書いていることが大事で、舞踊家も同じですね。ぼくの大好きな詩人大木実氏は、五十年以上になると存じますが、詩を月に三篇、未だにきちんきちんとお書きになるそうです。それが、自分のマイ・ペースだと言われているんですが、それを長い間、戦中は別ですが、崩さないでいらっしやる態度は立派だと思えます。ぼくも見習わねばと努力しているのですが、ぼくの出来ることといたら、何時に帰

宅しても、必ずず机の前に座ります。たとえ五分でも、昨日書いたものに目を通すとか、手紙を一本でも書くとかします。これだけがぼくの心積みたいなのので、詩から離れない、休んだら駄目だと。

藤井 そう、休んじや駄目だ。

小田切 スランプが来ても、それを突き抜けて行くには、やっぱり絶えず書き続けていること、踊りも同じだと思います。



小田切 清光 氏 (詩人)

に残るのは、一体何だろうなどと考えてしまっています。弛まず焦らず、自分の仕事を一生懸命にした人だと思えます。ぼく達の場合、そのように、どのような批評があっても、その評価が正しいかどうか、常に揺れている、時間のふるいにかからなければ判らないというところがあります。舞踊の場合、すぐに反響が出る。いろいろな悪いような、しかも印象的な批評が多い。それに作品がすぐ消えてしまうし……

行く、積み重ねてね。そこに新しいものが発見出来るんじゃないかと思う。

小田切 近頃、やっと自分の詩が少し書けるようになったかなと、ひそかに感じていたのですが、時流に流されず、トポトポでも自分の詩を書いていければ充分だということへ来ています。「赤と黒」といえばスタンダール、生きていた時は、小説を書いていたなんて誰も知らなかったそうです。世に知られるまでに百年という歳月がかかっています。後世

藤井 我々はその辺が辛いんです。

集団などでは作品を再演されるのがいいなあ、なんて思いますね。モダン・ダンスの場合、再演すると、なぜか気が抜けちゃって、その時代の雰囲気が出て来ない。その辺がぼくらの悩みですね。

良い作品は再演されていくべきだと思います。日舞の場合は芸のうまさの再演というのがあるんだけれど、モダン・ダンスの場合は、余りうまさばかりじゃないから……

挑戦こそ人生

小田切 今年はお嬢さんの香さんがスイスの第一回ローザンヌ新人振付家コンクールで見事モリス・ベジヤール賞を受賞され、おめでとうございました。NHK総合テレビで拝見しました。一度はNHK特集「香の挑戦」というタイトルで、更にコンクール決戦の作品をカットなして放送され、どちらも一時間番組で、藤井 香も知らない国へ行き、初対面のダンサーを使って、大変だったと思うけど、よく頑張りました。

小田切 「香の挑戦」は、振り付けしに行く様子を克明に追ったドキュメンタリーで、二度目は作品中心の放映で、これは舞踊界にとって一大センセーションです。快挙でした。テレビを見て、多くの人がモダン・ダンスに関心を持ったことでしょう。香さんの作品は「希望と旅立ち」というタイトルで、自分のありのままの気持ちを素直に、そして率直に表現されていて、コンクール作品中、抜群に優れていたと思えました。藤井さんのお嬢さん、尚美さん香さんお二人とも優秀なダンサーとして活躍して素晴らしいですね。

藤井 「香の挑戦」ではないが、我々も十一月十四・五日の俳優座で公演する「大地の晩餐」(小田切台本・藤井公・利子振付演出)に挑戦しなくてはね……全力で。

小田切 常に人生は挑戦、今は「大地の晩餐」に……それにしても藤井さんは、最後の最後まで粘りに粘る方ですから、周辺の者は大得意で、藤井 挑戦、挑戦ですよ。

現代邦楽事情

—その5—

邦楽ジャーナル編集長 田中 隆文

目的を達成した 「邦楽教育を推進する会」

前回、学習指導要領の改定準備作業が進められていく中で発足した「邦楽教育を推進する会」(以下邦推会)の活躍ぶりを、今年前半のトップニュースとして書いたが、その後、さらに大きなニュースが持ち上がった。七月二十七日、紙上で学習指導要領の素案が発表されたが、まず目に飛び込んできたのは、やたら大きな文字で書かれた「琴、三味線」というタイトルだった。その骨子は、日本の伝統を重視し、真の国際人を育成するという点で、音楽においては「和楽器を学校の実情に応じて取り扱うことを示す」など、日本の伝統(民族)音楽を重視する姿勢が打ち出されたものだ。これまでの経過から考えると、誰もが予期せぬ出来事だったに違いない。

邦推会の「学習指導要領に「和楽器の活用を図ること」を明文化する」という初期の目的はほぼ達成されたわけだが、この背景には、邦楽界各種団体による陳情もあったと思うが、何と言っても、全国から寄せられた三〇、七二名の署名と共に、一気に盛り上がりを見せた邦推会の運動と、立ち上がってくれた音楽議員連盟の力が大きく作用したようだ。また、日本の国際化が、逆に日本の伝統文化を見直させたという時代の流れもあるのかもしれない。

邦推会では、これを受けて早速に会を組織化することを決め、九月十五日、八十名の参加者を得て総会を開いた。そこで規約、役員が決定され、学校教育に邦楽を定着させるための事業内容が話し合われた。それによると、当面、和楽器のためのマニュアル作りと、十二月二十六日に開催する「第一回子ども邦楽まつり」に全力をあげることが決まった。「子ども邦楽まつり」には、九月末までに、小・中学校の団体十校を含め、何と三十のチビッ子合奏団が参加の名をあげている。

都立白鷗高校で

三味線八十三丁の大会奏

高校には、箏曲クラブが全国に多数あるが、珍しいのは、三味線を音楽授業に取り入れている都立白鷗高校。その三味線同好会八十三名と、和太鼓同好会十五名が、同校創立百周年記念式典(東京文化会館)で、見事な演奏を聞かせた(写真)。これから、学校での邦楽教育の手本ともなるだろう。

ともあれ、指導要領は今年十二月に告示され、来年からは全国の学校(特に小学校)で、楽器の購入や、先生対象の研修会が行われていくことになる。急がなければならぬのは、邦楽界側が、教育現場の要望に応えられる講師の斡旋や演奏団体の派遣をすみやかに進めるような態勢を作ることだと思ふ。



83丁の三味線大会奏

式典で演奏する
都立白鷗高校生



自肅が当たり前の当今

もう一題。天皇陛下のご容体の急変で、今や「自肅」の二文字が、日本国中で大安売りのごとく見られるようになった。当初、ほとんどの一般国民は、まさかその影響が我が身に及ぼうとは思わなかったのではないか。

折りしも、十月は芸術祭月間。取り止めや延期となったイベントは後を絶たない。おめでたい事はダメのよう。祝の字がプログラムから消え、急ぎふ曲目が変更されたという話は、そこら中で聞くことができる。特に邦楽の場合、鶴亀や松竹梅を折り込んだおめでたい曲がやたら多いので、関係者は大弱り。一人二

人で演るんだっただけだし、大合奏の場合、何ヶ月も前から練習日を作りくりして本番に望んでいるだけに、曲目変更にはやりきれないものがあるんじゃないかと、人ごとながら思ってしまう。各地の祭も、当然「自肅」の波を被っていて、それを樂しみにしていた子ども達の落胆の声も聞こえてくるというものだ。「自肅」とは、自らの判断でするものであって、させられるものであるとは知らなかった。

ともあれ、こんな状態がいつまで続くのか、そしてこれからどうなるのか誰にも分からないという、異常な現象が、今、起きているということを記しておきたい。

琴・三絃一式

株式会社 琴の長澤

京都・中京区四条旧御前通り上ル

TEL 〇七五・八二一・一三四五

団員募集!!

日本音楽集団では、来年3月に団員の募集を行う予定です。
詳しくは事務局にお問い合わせ下さい。

日本音楽集団 渋谷区笹塚3-17-1滝沢ビル302
☎03-378-4741

琴・三絃の製造・修理・販売!



竜勝堂

ローン御利用下さい

毎月第一土曜日はサービスの日。御来店のお客様に限り1割5分お引致します。(琴・三絃のみ)

営業時間 午前9:30-午後6:30 定休日(日曜日)
土曜日 午後7:30迄
松戸市大谷口外番場345-7

☎ (0473) 45-5807
作業所 (0471) 63-3864

創立100周年記念

15人の勅六太鼓



日本音楽集団定期演奏会から

第104回

石田 一志

会場超満員の盛況裏に、日本音楽集団第一〇四回定期が催された。今回は、アメリカ公演(第一四海外演奏旅行)の成果披露の為の三時間コンサート。会場の雰囲気だけでなく舞台も華やか、演目も大層充実していた。

るきなど多楽章に変化を配した、いわば壺をこころえた筆緻だが前二作程の新鮮さはない。

第二部は、東西楽器の交流。三木稔の「鳳凰三連」の第一曲「序の曲」(六九)ではじまる。三曲合奏は坂田誠山、木村玲子、坂井敏子、弦合奏が新日フィル。久々聴いたが、弦の楽想の美しさが印象的。筆者は「破の曲」のドラマ的展開を好むが、この「序の曲」には作曲者の感性がま

演目は三部に構成され、第一部は三つのアメリカ人作品。アメリカの現代音楽には、ヘンリー・カウエル、ハリー・パーチ、コリン・マクワイー以来の東洋志向の伝統があるが、その采譜の一端が示された。ジュン・フィリップスの「トワイライト・スノー」(八六)は作曲家自身の笙、田原順子の琵琶、坂田誠山の尺八のトリオの演奏。邦楽器を用いるが作風はインド音楽。笙のドローン、琵琶のリズムを背景に尺八が歌う。良く聴くと尺八はよく書けており、ここに特徴がある。全体的には我々にはない発想として好感は持つ。ジョン・ケージの「竜安寺」(八三)は、竹井誠の笛、黒坂昇の打楽器。これまでもフルートやオーボエなど異なった管楽器で聴いているが今回の編成がベストと思う。スタティッシュな神的美意識をケージは良くとらえている。デイヴィッド・ロブの「協奏組曲」(八四)は藤崎重康の篠笛を中心とする和楽器合奏。集団のサウンドの特色をだし、叙情性や囃子の明

本初演。和田薫の「楽市七座」(八八)は、竹井誠の笛、高橋明邦、黒坂昇の打楽器とマイケル・ウドーとミシガン・パークカッション・アンサンブルの共演。即興的な見せ場にもあふれたダイナミックな作品。会場は沸いたが、三木作品や次の吉松作品に比べるとタッチが粗くなっているのは否めない。吉松作品は弦楽合奏と邦楽器群の大合奏曲「効効効果」三章からなるが、弦に古松得意のモダンな持続音が響きはじめてからが聴きもの。雅楽風の格調の高さが次第に形成されていった。第三部は、おなじみの三木の「凸」と長沢勝俊の「大津絵幻想」が、マラソン・コンサートを締めくくる華やかさで演奏された。

(六月二十一日 朝日生命ホール)



<トワイライト・スノー> ジュン・フィリップス曲



<RYOANJI> 竜安寺 ジョン・ケージ曲



<凸> 三木稔曲

第105回

若い世代に伝えたい、若い世代に贈りたい
青少年のための日本音楽

日本音楽集団は小、中、高校での鑑賞会を積極的にに行っているが、今年には十年に一回の学習指導要領改定が行われる年でもあり、日本の次代を担う青少年に我々から伝えたい、贈りたい音楽として、平素の学校向けプログラムを更に更に検討を加え、再編成したものを初めて定期演奏会の場で発表したものである。

日本人でありながら、日本の楽器のことについてはあまり知らないのが実状であり、その意味からは楽器紹介をかねた「古典の世界」の部分など、大人にとっても新鮮で充分に楽しむことができたと言える。今回のために新しく編曲された「旋律集」(宮下博次編曲)など、注意深い選曲と秀逸な編曲で魅力あるものにしていった。

ふだん着の七人編成による「秋の一日」(長沢勝俊作曲)や、大合奏による「デイヴエルトイメント」(佐藤敏直作曲)、「四季」(ダンス・コンセルタント1)、「三木稔作曲」など、定岡小百合さんの明るくさわやかな司会によって進められ、一層流れのよいプログラムができたことは、今後の集団にとっても、又ひとつ財産がふえたことになる。

(九月二十八日 芝公園ホール)



大合奏の魅力



尺八の楽器紹介をするメンバー



アイ・エム・エス

●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣

〒167 東京都杉並区上荻 2-21-25
オリオンシャトー1F
PHONE. 03-397-2292

日本音楽集団 第14次海外公演を お世話しました。



郵船航空サービス株式会社

渋谷旅客営業部

〒150 東京都渋谷区道玄坂1-13-5

電話(03)780-2082

団体科：佐藤／木下／熊谷

●東西楽器の交流



〈序の曲〉—三木稔曲 新日フィル弦楽アンサンブル



〈独奏効果〉—吉松隆曲



〈律市七郎〉和田康曲 マイケルワトロー&ミンガン大学パーカッションアンサンブル



オープニングは軽やかに



親しみやすい服装で（7人編成）

信 頼 の 品 質

箏
三 味 線

◆ 田 波 楽 器 株 式 会 社

〒537 大阪市東成区
東今里二丁目 4 - 6
TEL 06(976)1885
FAX 06(974)9632

◇優れた技術で日本の音をおとどける◇

北 国 の 秀 作

都山流 …… 沢山銘
琴古流 …… 沢仙銘 尺八

尾崎尺八工房

☎(011)582-8119

〒005 札幌市南区澄川 4 条 9 丁目 4 - 10
(地下鉄南北線自衛隊前駅下車 5 分)

最 高 の 品 質

常 盤
強力®
琴 糸

サエ グサ
三 枝 商 店

琴・三絃

一 藤

ローン・下取り・修理致します。

[八千代店] 千葉県八千代市八千代台北
17-16-13
☎0474-84-8859

[調布店] 東京都調布市上石原
1-6-14
☎0424-84-0092

美恵子の三味線みてある記

邦山氏と共に

第三十回の秋田県芸術祭が、十月一日に秋田県民会館で開催された。そのオープニングとして、はじめに大島渚氏による「映画を通して見た世界」の講演があり、その後、日本音楽集団の演奏が行われ、特別出演として、尺八の山本邦山氏とピアノの佐藤允彦氏が出演された。

山本邦山氏は、日本音楽集団初期の演奏会に出演されて以来、久々の集団との共演だった。一曲目は、日本音楽集団による長沢勝俊作曲の〈組曲・人形風土記〉、そして邦山氏と佐藤氏のお二人によるヘシルキー・アドヴェンチャーに続き、邦山氏の尺八と日本音楽集団による長沢勝俊作曲の尺八協奏曲があり、最後に三木稔作曲ヘダンス・コンセルタント・四季を日本音楽集団が演奏した。

山本邦山氏と佐藤允彦氏の演奏によるヘシルキー・アドヴェンチャーは、圧巻だった。聴衆を魅了する、エネルギー溢るような、命のほとばしる



ような演奏が延々と続き、その、強力な磁石に引きつけられるような演奏にあっけにとられ、舞台のそででお二人の演奏を見守る団員の中には涙を流す人もいて、ただただ素晴らしい、心から感動するものだった。邦山氏にとって、この日が初めての演奏となった〈尺八協奏曲〉も、密度の高い、きめ細やかな、すき通る力強い音で鮮烈な印象を与え、カデンツアの自由なアドリブの部分も、邦山氏ならではのものが、バツクと三味線を演奏する私も、その間、しばし聞きはれて我を忘れていた。

本番の始まる前、邦山氏に楽屋でうかがったお話も、魅力的なものだった。「日常生活では怒りを忘れ、喜びを求めて自然に空気のようになんか行きたい。年をとるに従って、歌を出したくない。しかし、音楽には欲をもって、嘘のない、自分の精一杯を出し、いつもファンのために一生懸命演奏したい。だが人生には無欲で、あせらず、急がず、亀のよう



野口 美恵子

に、ゆっくりと、自分の力や生活を見つめながら、多くの人々に良いものを差上げて行きたい。音楽は、オリンピックと違って記録のない世界なので、競争心をもたず、心に遊びをもって過したい」と人生観を語られた。好きな言葉は「常に遊びの心、余裕の心」。「人を笑わせるような素朴な感動の駄ジャレの心でいると疲れない。今日終わったら、その日のことを忘れる」とも話された。健康法は「怒らない。よく寝る事」。あつという間に、一気にこれだけの事をお話下さった邦山氏。ゲネプロの力強い演奏からは想像もなかった、「無欲」という言葉に、しかし、だからこそ、あの集中した演奏が生まれるのかもしれないと思う私でした。団員の中には、学生時代から邦山氏にアコがれていた尺八奏者もいて、この日の共演は、多くのお客様と共に、メンバーにとっても、この上なく嬉しい充実した感動の一時でした。

小さな空間 大きな出会い

工藤 哲子

サロンコンサートレポート Vol 4

今年も夏らしい暑い日が少ないばかりか雨がかり……。日常生活でも随分湿気に悩まされたが、この湿気は楽器にとって最大級の敵。音色や響きが悪くなるばかりが、絃楽器では絃が切れ易くなったり、三味線などでは皮が破れる等、調整も難しくなってしまう。こんな中でもパワフルに催されたサロンコンサートの近況報告。

●No.24 「青山恵子の論文『発声法を考ふる』を聴く」——日本語から生れる日本人の声・パート1（民謡の声） 企画・構成 田村拓男（8/1）。

日本の音楽は日本語が原点という視点から、現代の音楽曲、延ては現代邦楽のあり方を探っていくようにする初のレクチャーコンサート。今回は音楽家、青山恵子さん（特別出演）の「発声法を考ふる」という話を中心に、ベルカント唱法、民謡（歌）紺野初美、尺八—米谷龍男：特別出演）の歌唱法を比較させながら、

日本語の歌曲における発声法を考ふるものであった。

内容はかなり専門的だったが、「日本語の発声」ということに興味を持たれる方が多いのだろう。大勢の方が三時間に及ぶ熱っぽい講演や演奏に熱心に耳を傾けていた。

アンケートからは「興味深い内容だったし、もっと知り下げて欲しい。わかり易いレクチャーコンサートをもっと定期的に催して欲しい」という声が多かった。

●No.23 「三重奏特集」（9/4）
尺八、三絃、箏等、それぞれの音色を活かした三重奏曲の演奏に加え、同一曲を弾き比べるコーナーがあり、楽器の特性や音色を楽しむことができた。

●No.25 「Do, Do? Do!」ときのおにしをいとかからめて」（9/4）
山田まゆ美（琵琶）と工藤哲子（三絃）のジョイントコンサート。ルーツを辿れば一つになると考えられる「琵琶」と「三絃」を使い、それぞれ

の世界をあらわそうとしていた。

●No.26 「尺八本曲特集」（10/26）
尺八本曲を追求している黒川欣也の独演会を、人間意識の奥深まで浸み入る独自の世界を醸し出していた。（アンケートをまとめて）

サロンコンサートが毎月催されるようになってまもなく二年になる。アンケートを通して伺った意見をまとめてみた。

総数100名 男性71名 女性70名（記名のみ）
男性からのアンケート数が多かった企画。No.10「琵琶・語りの特色」、No.15「語り物の世界・浪曲二題琵琶二題」、No.14「尺八+弦楽四重奏」、女性からのアンケート数が多かったのは、No.11「箏と尺八のアンサンブル」。

サロンコンサートについての情報は、ほとんどの人が、知人や出演者からというものが多かった。
コンサートのスタイルに対しては、米場された時の演奏楽器や編成、演

奏人数を望まれる傾向があるが、どの回でも、語りや歌を伴う演奏、洋楽器との合奏、ポピュラー等の演奏を聴きたいと書かれていた方が多かった。その他、古典、一般的に知られていない曲を取り上げて欲しいという意見や、サロンコンサートならではの、演奏に加えて、楽器や曲目等、楽しいおしやべりももっと取り入れて欲しいという声もあった。

サロンコンサートについての全般的な印象としては、「アットホームな感じ」、「大きな会場では知ることができない演奏者の緊張感や息まで伝わってくる」、「音を通して楽器の暖かさや表現をより大きく感じる事ができる」という意見が多かった。さらに「もっと広く広報し、長く続けて欲しい」という暖かい声も多かった。

最後に、アンケートに御協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

私は、音楽を一生の仕事として志し、ある音楽団体に所属している女性です。同時に妻であり主婦であり母親でもある身として、いわゆる「アグネス論争」を面白く眺めていましたが、私にもひとこと言わせて欲しい衝動にかられてペンをとりました。

アグネス

ほろび抄

私の所属する団体は、邦楽を現代に蘇らせ新しい日本の音楽を創ろうとする芸術創造団体で、日常的にはその音楽を普及させる楽団活動が中心です。

ここには楽員職員あわせて五十五名が所属しそのうち二十八名が女性です。女性のうち既婚者は結婚経験のある人を含めて十九名で、その中の十二名が子どもを育てながら活動に参加しています。

ところで、結婚・妊娠・出産といういわゆるひとつの女のしあわせを、家庭に入る深さという形でかつて三浦レイバツク百恵さんが演じ、こどもはナイスなアクセサリーとでもいうように、いま松田フーレンス聖子さんがシヨーパーツなっています。芸能人の業とでも言うのでしょうか、さすがスターというものです。

そしてアグネスさんも、働く母親の姿をもって表現しようとしているのでしょうか。

日本音楽集団 1988年 7月～10月の主な活動記録

7月4日(月)

No.23 サロンコンサート

アコスタディオ

7月11日(月)

ノートルダム清心女子中学・高校音楽鑑賞会

広島郵便貯金ホール

7月20日(水)

六本木ハートランド

7月23日(土)

ハートランド・ピアジヤングル

8月1日(月)

No.24 サロンコンサート

アコスタディオ

8月10日(水)

世界人形フェスティバルで「人形風土記」をアクトと上演

朝日生命ホール

8月23日(火)・26日(金)

佐久音楽鑑賞会

9月1日(木)・2日(金)

日本音楽集団マリオンプ公演

有楽町朝日ホール

9月5日(月)

日本音楽集団演奏会——日本音楽の夕べ

出雲市民会館

9月5日(月)・12日(月)

出雲市巡回学校公演

9月21日(水)

No.25 サロンコンサート

アコスタディオ

9月28日(水)

第105回定期演奏会

芝abc会館ホール

9月30日(金)

秋田県鹿角市学校公演

10月1日(土)

秋田県芸術祭オーブニングに出演 秋田県民会館

10月3日(月)・7日(金)

広島県巡回学校公演

10月12日(水)

津西高校音楽鑑賞会

三重県文化会館

10月14日(金)

市立広島商業高校音楽鑑賞会

10月18日(火)・20日(水)

酒田・角館学校巡回公演

広島郵便貯金ホール

10月22日(土)

滝野川第四小学校音楽鑑賞会

10月26日(水)

No.26 サロンコンサート

アコスタディオ

10月27日(木)

市川市学校巡回公演

10月31日(月)

横浜市中立中稲田中学音楽鑑賞会

11月7日(月)

東京女子館音楽鑑賞会

渋谷公会堂

11月9日(水)

第106回定期演奏会

朝日生命ホール

邦楽器全般

わらびみや楽器店

〒598

泉佐野市栄町6～11

TEL.0724(63) 1246

でもね、音児は嵐の現象よ。
ミルク・おむつ・夜泣き・酒気、
這う・立つ・歩く・もらす、ちら
かす・汚す・こわす・けがする、
送り迎えの保育園・入学する・ホ
ッとする・グれる、と果てしない。
それでも、いつもことものそばに
いて、すべったころんだを見てい
たい。立った歩いたラッパを吹い
た、と、成長の節目には立ち会
いたい。そうした「親心」と「私の
時間」が対立してきしみます。
このことは、子連れで動けば解
消するとういうものではありません
し、日々の練習時間はいくらあつ
ても足りません。できることなら
親としての時間と音楽する時間を
区別したいのが本音です。
私のいまの環境は、望んで得た
ものとも言えるでしょう。音楽は
私の人生ですし、家族もまた私の
生きがいです。ですから、どんな
苦勞にも耐えてみせます(二二関
西井で)。
でも、働く母親はつらいばかり
ではない筈です。確かに働きな
がら子育てする環境に恵まれては
いませんが、真剣な人生をこどもに
見せてあげられるのですから。
いまや「論争」はマスコミの代
理戦争を思わせ、読者の投稿を含
めて過熱きみの様子です。どうぞ
冷静になって、たまには十二人の
働く母親がいる日本音楽集団の、
あたたかい音楽を聴ききって下さ
い。

(黒髪 望)

日本音楽集団及び団員等の今後の予定

11月11日(金) 栃木県太田原市学校公演	11月13日(日) 上田グロリア合唱団定期演奏会に出演 上田市民会館	11月13日(日)・15日(火)・17日(木) オペラ「ヘビョウリ」(三木稔作曲)に、坂田誠山・吉村七重・田中悠美子が出演 日生劇場	11月12日(土)畦地慶司胡弓音楽院胡弓講習会(東京)・17日(木)同演奏会(大阪国立文楽劇場小ホール)・12月4日(日)同講習会(札幌教育文化会館練習室)	11月13日(日) 「読響オーケストラ・ハウス」(日本テレビ)にて広瀬量平作曲(尺八とオーケストラのための協奏曲) (尺八三橋貴風)・三木稔作曲(秋の曲)二橋・吉村七重)他を放送	11月17日(木)・18日(金) 市川市巡回学校公演
11月18日(金) 第10回田原順子真前琵琶の会 名古屋じゆうぶたい勧進座	11月18日(金) 黒取昇ジョイントリサイタル——江戸と津軽のサウンド 青森市民文化ホール	11月21日(月) 静岡県藤枝南高校音楽鑑賞会	11月23日(水) 88富士見教育フェスティバルに集団が出演	11月30日(金) NHK FM「邦楽のひととき」にて畦地作曲(胡弓と等の二重奏曲「春の調べ」)を放送	12月9日(金) 宮田耕八朗尺八リサイタル 大阪朝日生命ホール
1月22日(日) 三橋貴風・吉村七重ジョイントリサイタル ダイアモンドビル室内楽ホール(鶴川駅前)	2月2日(木) 第10回定期演奏会 パリオホール	2月10日(金) 関市内中学校鑑賞会 関市文化会館	2月18日(土) テレビ朝日二十周年記念に出演 サントリーホール	2月26日(日) 大島博子・菜穂子ジョイント・コンサート パリオ・ホール	3月19日(日) 美濃加茂公演 美濃加茂市文化会館
5月1日(月)・2日(火) 下田市学校音楽鑑賞会 下田市民会館	5月9日(火) 第10回定期演奏会 朝日生命ホール	12月16日(金) 田原順子琵琶の夕べ 横浜スペースオクタ	1月18日(水) 都響定期で語井誠作曲「偶村」に尾崎・三橋が出演 東京文化会館		

月刊邦楽イベント情報誌

邦楽 ジャーナル

雑誌や電波に乗って情報が氾濫するご時世ですが、こと「邦楽」となると、その情報の入手は困難をきわめます。おそろく口コミとチラシに頼っているのが現実でしょう。コンサートに限らず、オーディションやコンクールの受け付け、合奏団の団員募集、邦楽器商組合の活動などもあまり知られていません。この雑誌は尺八と箏の音楽を中心に、ナマの情報を全国から集めてビジュアルに提供します。

- ▼きめ細かい確かな情報▲
 - コンサート情報／ライブ情報
 - ラジオ・テレビ情報／団体情報／時事的情報
 - ▼シリーズで追う身近な記事▲
 - 潜入ルポ／楽器の基礎知識／楽器造りの現場
 - 邦楽と教育界／今月の問題点／クロスオーバー
- 毎月1日発売・11月号特集「アマチュア合奏団」



A4判
定価350円(送料60円)
年間講読=4200円、
半年講読=2100円(送料別)

発行/邦楽ジャーナル
〒160東京都新宿区高田馬場3-39-9
グリーンハイツ202 ☎03-360-1329

日本の響
真山銘尺八

真山

〒561 豊中市服部本町5丁目5-6 TEL(06)863-0564

デザイン
永谷繁山

「つみたてクレジット」で
大きな安心と計画つみたて

積立ファミリー
安心保障



安田火災海上

積立家族傷害保険
新発売

健康はご家族の大きな財産。
だから備えが必要です。

- ※ 損害保険の安田火災はあなたの暮らしをワイドに補償致します。
- ※ あなたの保険設計は明和損害保険企画におまかせ下さい。

日本音楽集団指定損害保険代理店
明和損害保険企画

RM 小笠原 明男 オフィス ☎937-0547
安田火災海上保険株式会社 ☎962-7311

永い伝統と経験から創り出される
豊富な“止水の和楽器”



—新発売—
明鏡笛(しの笛)
(正律管)
ベース三味線



止水の和楽器 発売元

明鏡楽器

〒130 東京都墨田区横川4-1-2 ☎(03)623-6349(代表)

創業・昭和8年

お琴・三味線の琴栄

●東海一の実績を誇る店



◇1階・店舗

- ◇三味線、尺八、箏、多数陳列
- ◇お琴、三味線、尺八の付属品、楽譜 多数取揃えてあります

◇2階・お琴展示場(ミニ舞台付)

- ◇お琴、桜目琴、20絃琴、17絃琴と豊富に取揃えてあります
- ◇ミニ舞台でお琴を弾いて下さい

(お買い求め) クレジット販売をご利用下さいませ。(最高36回払)
(パンフレット) 無料送付致します。



御琴・三味線専門
琴栄楽器店

代表・増田康壽

〒500 岐阜市町町九(大学病院前)
TEL (0582) 61825代



尺八
露秋

西田露秋

〒794 今治市新谷甲 798-1
電話 (0898)48-1097・1257

日本の佳き

伝統と

ともに



能楽長唄用

太鼓・小鼓

歌舞伎座・国立劇場御用

創業文久元年 / 宮内庁御用達

株式会社 宮本卯之助商店

本店 ● 東京都台東区浅草六丁目一番十五号

〒111 電話(03)874-4131(代)

FAX(03)875-6602

西浅草店 ● 東京都台東区西浅草二丁目一番一号

〒111 電話(03)844-2141(代)

銀座店 ● 東京都中央区銀座七丁目八コリド街

〒104 電話(03)572-6321(代)

●詳細カタログご進呈いたします。

応援します「邦楽現代」

和楽器専門店

老舗

KK金善楽器店

京都市東山区大和路通り四條下ル二丁目亀田町五七

TEL 五六一―二九四〇 五四一―一〇九三

(075) 五二五―一三七五 (夜間)

鳴物太鼓

創業天保六年

株式会社 岡田屋布施

歌舞伎座

新橋演舞場

明治座

各放送局

各流家元

代表取締役 布施太久藏

台東区雷門一丁目十六番五号

(地下鉄田原町下車雷門通り角)

電話 〇三(八四一)一八六七

FAX 〇三(八四三)六四九三

〈年中無休〉



- 代表 長沢 勝俊
副代表 田村 拓男
副代表 坂田 誠山
事務局長 奈良 義寛 (局長)
事務 森島 素子
監事 丹沢 英雄
マネージメント協力
株式会社 ジャパン・アーツ
- 名譽役員 山田美壽子
- 役員通名
(正役員)
望月 太八 (二曲)
西川 浩平 (二曲)
宮田新八朗 (尺八)
坂田 誠山 (尺八)
- 三橋 貞風 (尺八)
藤崎 重康 (尺八・笛)
竹井 誠 (尺八・笛)
米澤 浩 (尺八)
若川 欣也 (尺八)
睦地 慶司 (胡弓・作曲)
野口美恵子 (三味線)
大田 幸子 (三味線)
加藤 洋 (三味線)
高橋 明郎 (打楽器・指揮)
黒坂 昇 (打楽器)
細谷 一郎 (打楽器)
田村 拓男 (指揮・打楽器)
稲田 康 (指揮)
長沢 勝俊 (作曲)
内田とも子 (作曲)
中島 隆 (楽器係)
- 木村 玲子 (管)
内藤 洋子 (管)
滝田美智子 (管)
熊沢栄利子 (管)
大島美穂子 (管)
佐藤由香里 (管)
尾崎 太一 (打楽器)
野田 啓輝 (打楽器)
高橋 明郎 (打楽器・指揮)
久東 寿子 (管)
島崎 春美 (管)
佐藤 里美 (管)
水谷 雅康 (尺八)
水川 寿也 (尺八)
工藤 哲子 (三味線)
山田まゆ美 (琵琶)
山田 美子 (琵琶)
佐藤 里美 (管)
島崎 春美 (管)
久東 寿子 (管)
高橋はるな (管)
高橋 智水 (管)
松井 智水 (管)
安武由香理 (管)
山田 明美 (管)
前田 文明 (打楽器)
望月太喜之丞 (打楽器)
秋岸 寛久 (作曲)

- 協力役員 伊藤 惣一
地方在住役員 塚本 早苗
田嶋忠美子
- 昭和六十三年十一月現在

- (賛助会員)
(株)ムヤコ編物
- 滝沢 修 霜島 邦子 増田 啓子
野坂 操寿 古川羽衣山
鶴田 錦史 丹野井成寿

- (団友)
- 青木 誠 芹沢 英雄 増田 睦美
秋沢 悟史 高野 文子 三木 稔
荒谷 俊治 田嶋 直土 宮本 幸子
稲垣 隆史 田中 利光 元橋 康男
小田切清光 鶴野 和子 久崎 明子
川崎 祥悦 戸井 昌造 柳家小二治
菊地 慎子 藤倉 昌悦 横山 勝也
楠 知子 藤倉 昌悦
鞍掛 昭二 仲俣中喜男
蛭沼 広行 中村 八大 デイヴィッド・ロープ
佐藤 敏直 野口 鎮 ヘンリー・バーネット
芝 祐靖 広瀬 豊平 ラニー・シエルダン
清水 義矩 福田 輝久 王 燕樵
杉浦 弘知 藤声 晴山 張 曉輝
砂崎 知子 星 旭

日本音楽集団支部

関西支部 田嶋直土
水戸支部 香藤幸山
長野支部 佐藤幸山
山梨支部 堀見
長崎支部 牧山雅太郎
熊本支部 古川羽衣山
秋田支部 野口裕子

邦楽の会つばら事務局

編集後記

●秋のシーズンを迎えると、音楽界は一層賑かになる。集団のメンバーは個々にも忙れているので、集団のスケジュールを組むにもまよまよすることが多くなった。しかしこの秋は、天望集団による音楽で仕事のキャンセルに会ったメンバーもかなり……。同本文化協会の「私は歌謡曲に生命をかけているので、自棄するわけにはいかない」という言葉を如何に聞く。

●編集子も毎年この時期になると、演奏会の準備と「邦楽現代」の発行が重なり、生活のための仕事と合せて一年の内でも最も忙しい時期。連日書き、編集に追われ、夜が長く、なんとお参りさえ、でき上った横断訪を見る事の喜びはひとしお。一層のこまごま。

邦楽現代 Pro Musica Nipponia 第21号

定価 五〇〇円

一九八八年十一月九日発行

発行所 日本音楽集団
東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル202
〒151 電話 〇三三三七八一四七四一
発行責任者 田村拓男
印刷所 光栄社

●本誌21号の店告掲載者御芳名

アイ・エム・エス、一勝、いづみや楽器、藤岡田屋市場、尾崎沢山、有家庭音楽
会出版部、炊金舎、琴光堂和楽器店、倉持楽器店、琴栄楽器店、株野の長澤、
三枝商店、田中家、田波楽器株式会社、水廣真山、西田露秋、邦楽商品券情報、
富本切之助商店、明鏡楽器、明和損害保険企業、新船航空サービス株式会社

◎待望の長沢作品を録音化 長沢勝俊作品集

No.1 飛騨によせる三つのバラード 800円	No.11 琴協奏曲 700円	【尺八譜】	飛騨によせる三つのバラード 400円
No.2 まゆだまのうた 400円	No.12 雲三巻 800円		まゆだまのうた 300円
No.3 合奏曲 六段 600円	No.13 北国雪歌 900円	秋によせる三つの幻想曲 400円	
No.4 春三巻 600円	No.14 樹冠 700円	六連星 300円	
No.5 秋によせる三つの幻想曲 600円	No.15 萌春 500円	二つの田園詩 300円	
No.6 春のしらべ 500円	No.16 合奏曲みだれ 700円	樹冠 300円	
No.7 合奏曲 千鳥 500円	No.17 合奏曲 八千代獅子 600円	萌春 400円	
No.8 六連星 400円	No.18 琴四重奏曲 700円	四つの小品 400円	
No.9 琴三重奏曲 600円	No.19 四つの小品 700円		
No.10 二つの田園詩 500円			

平810 福岡市中央区大名1-3-41
☎(092)741-2458 振替口座福岡8-5500

(有) 家庭音楽会出版部

